

が、その後も党機関紙にコラム「思索」を執筆し続け、この国の内外政策に影響を持ち続けた。文字通り、カストロ氏はキューバという国家の代名詞だったと言える。

危機続きの革命キューバ

日本でもファンが多い。とりわけ私が注目するのは、駐キューバ大使を務めた日本の外交官が、退任後、カストロ氏について好意的な著作を相次いで出版しているという事実である。

最初は、1991年から駐キューバ大使を務めた宮本信生氏の『カストロ』であり、次いで出版されたのが、1996年から同大使を務めた田中三郎氏の『フィデル・カストロ — 世界の無限の悲慘を背負う人』（同時代社、2005年）だ。同氏はその中で、「『神器』として『十字架の犠牲』と『ヨブの忍耐』に生き、永遠の世界を凝視する精神の自由で生きる愛と平安の人フィデル・カストロは、一言でいえば崇高な精神の人である」と書いている。

2009年から駐キューバ大使を務めた西林万寿夫氏も大使退任後、『したたかな国キューバ』（アーバン・コネクションズ）を出版したが、その中でカストロ氏に触れている。

カストロ氏が主導した革命キューバは、成立後、まさに危機続きだった。

キューバ政府が革命直後に米国企業を接収すると、米国は1961年にキューバと外交を断絶。これに対抗してキューバが「社会主義」を宣言すると、米国は亡命キューバ人を中心とする傭兵軍をヒロン湾に上陸させた。1962年には、米国とソ連・キューバが対決し「戦争直前」と世界を震撼させたキューバ危機が起こる。この年、米国はキューバに対して全面的な経済封鎖を断行、これは今なお続いている。

米国による経済封鎖によってキューバ経済は大打撃を受け、深刻な経済不振が慢性的に続く。それに追い打ちをかけたのが、キューバの後ろ盾であったソ連の崩壊（1991年）であった。このため、米国に移住・亡命するキューバ人が増えた。

「赤い貴族」は存在しない

こうしたことから、革命以来、これまで何度も「カストロ政権は崩壊する」との見方が流布されてきた。しかるに、まだ崩壊してはいない。なぜだろうか。

宮本信生氏は『カストロ』の中で、「カストロ政権はなぜ崩壊しなかったのか」と問い、次のように述べている。

「カストロのキューバ革命の原点は平等社会と対米自主・独立の達成であった。そして、平等社会についてカ

ストロはいわば疑似ユートピア的平等社会を達成した。国民の間の平等であるのみならず、国民と指導層との間の平等でもあった。従って、キューバには赤い貴族・ノーメンクラトゥーラは存在しなかったし、現在もそうである。カストロ指導部は、ベトナムのホー・チ・ミン指導部を別として、かつて存在したいかなる共産党指導部よりも無私であり、清廉であるといえよう」

「カストロ兄弟が別々に居住している住居は、警護こそ厳重であるが、通常の住宅である。旧ソ連・東欧諸国の指導者の贅沢とは比較すべくもない」

「国民は極度の経済的困難に直面し、大いに不満である。……しかし、ノーメンクラトゥーラが存在しない清廉なこの平等社会においては、旧ソ連・東欧諸国に存在したような、一般国民の党・政府指導部に対する妬みや恨みは存在しない。この事実こそ、経済的危機の中あって、キューバの政治的・社会的安定が維持された最大の要因であるといえよう。そして、それはいまも変わらない」

ノーメンクラトゥーラとは、旧ソ連圏で「赤い貴族」と呼ばれた、特権的な生活をする政治家や官僚たちのことである。

また、元駐キューバ大使の田中三郎氏は『フィデル・カストロ — 世界の無限の悲慘を背負う人』の中で「フィデル・カストロは、誰よりも無私の心に生きる人である」と述べている。

さらに、「フィデル・カストロ・ルス。老いぼれた、極悪非道の独裁者か、はたまた理想を捨てない不屈の巨人か。いずれにせよ、虚実を自分の目で確かめたい」と、2度、キューバ行きを果たし、ついにカストロ氏との面会に成功した作家の戸井十月氏（故人。2009年1月にキューバ友好円卓会議が開いた「キューバ革命50年・ゲバラ生誕80年記念キューバ友好フォーラム」で講演）は、著書『カストロ 銅像なき権力者』（新潮社、2003年）の中でこう書いている。

「カストロは無私である。それは間違いない。カストロは、生きた時間の殆どをキューバのために、キューバ人のために使ってきた。そのためならいつ死んでも構わないという覚悟の中で生きてきた」「キューバにノーメンクラトゥーラは存在しない。だから、多少苦しくとも人々はカストロらを支持する」

カストロ執行部が、深刻な経済不振の中にあっても、国家予算の半分以上を投じて維持してきた教育と医療の無料化政策も、キューバ国民の大半がカストロ執行部を支持してきた一因だろう。西林万寿夫著の『したたかな国キューバ』にも、「多くの人々はキューバの社会主義を信

じている。経済がうまく回っていないことは分かっているが、医療や教育が無料というところが大きい」と書かれている。

個人崇拜も認めず

いま一つ、キューバが他の社会主義国と著しく違う点を挙げておこう。

私はこれまで3回この国を訪れたが、いつも印象に残ったことの一つは、この国の街頭にカストロ氏の肖像写真が飾られていないことだった。銅像もない。かつて私が訪れたソ連、中国、北朝鮮では、国中の至るところに最高指導者の肖像写真が飾られ、銅像があった。あまりのはんらんぶりに驚いたことを今でも鮮やかに覚えている。それは、異様な光景だった。

聞くところによれば、カストロ氏は、自分の写真を街頭等に掲げることを禁じていたという。そのことは、この政治指導者の「清廉さと無私」とつながっているように私には思われ、清々しささえ感じた。

どうなるフィデルなき後のキューバ

フィデルの死去でキューバはどうなってゆくだろうか。にわかには判定できないが、当面は、ラウル・カストロ執行部がフィデルの精神と政治路線を受け継いで国造りを進めてゆくに違いない。問題は、革命を経験していない若い世代の動向だ。この人たちが、これから先、フィデルの精神と政治路線を継承してゆけるかどうか。キューバ政府の関係者は「若い世代に対しては革命教育をしっかりとやってきているから心配ない」と言うが……。

それから、今年（2016年）4月に開かれたキューバ共産党第7回大会で打ち出した経済改革と、米国との国交回復により、国民間の経済格差が広がるのではないか。キューバ革命が目指した「平等」に亀裂が生じた時、国民の団結と社会主義体制が果たして維持できるかどうか。「巨星」の死去で、人口1100万人の国・キューバは難しい局面を迎えるかもしれない。

2016年11月28日付のブログ「リベラル21」に発表した原稿に加筆



カストロ元キューバ国家評議会議長の死去に伴い、キューバ大使館を訪問した円卓会議メンバー。右から事務局長の杉本茂樹、岩垂弘・共同代表、大賀達雄・事務局長

キューバそしてフィデルとの出会い

仲間たち 「コンパニエロを大切に」 と言ったフィデル

松村真澄 ピースポート（写真右端）



2010年9月21日、ピースポート「地球一周の船旅」参加者約700名が、キューバのフィデル・カストロ前議長と面会。2時間半にわたる交流会が行われ、カストロ前議長は、国際平和の実現や核兵器廃絶への思いを語った。

キューバは誇りと名誉に溢れていた

2016年11月26日昼過ぎ、私はインターネットニュースで、フィデル・カストロ前国家評議会議長死去を知った。10月26日、ピースポート受け入れ業務のためのハバナ滞在から1か月後のことである。

数日間は、キューバ市民の悲しみ、マイアミでお祭り騒ぎをする亡命キューバ人、世界中から死を悼む言葉の数々、今後の米玖関係などが取り上げられていた。

私も在日キューバ大使館を弔問し、涙ぐむ大使館職員といろいろ語り合った。その間、大使館に初めて来るといふ弔問者も見られ、直接キューバとの関係がなくとも、影響を受けた人は数知れないことを再認識した。

カストロ前議長の広島訪問のパネルが置かれ、2003年の来日を思い出す人も多かったはずだ。

私がキューバと出会ったのは2001年、ピースポート地球一周の船旅にボランティア通訳として乗船したときだった。スペシャルピリオドを乗り越え、キューバ社会は少し安定して見えた。ゲストスピーカーとしてラスパルマス～ハバナ間を乗船したのが、日系2世のフランシスコ宮坂さん、サルサダンサー、ICAP（キューバ諸

国民友好協会)メンバー3名だった。

私はそこで、キューバ革命とその英雄たちを知った。3名が語るキューバは、誇りと名誉に溢れていた。

ハバナでは交流プログラムに参加し、その社会システムとの中で暮らす人びとの人間らしさに驚かされた。道を歩くと、独立の父ホセ・マルティの胸像や、革命を戦ったチェ・ゲバラのポスターや壁画があちこちに見られた。それ以上に記憶しているのが、教育施設や医療機関の壁の片隅に書かれカストロ前議長のサインとメッセージだった。

あるコンピューター学校の壁には、「この時代の若者たちを羨ましく思う(自分はコンピューターを学んでいないので) Fidel」というメッセージのとなり、数年後に書かれた「もう羨ましくないよ(私も学んだから) Fidel」があった。市民がどんなことをしているのか、直接訪ねて見るのが常だったと説明してくれた。

子どもたちのミュージカル劇団「コルメニータ」と交流したときのこと、ディレクターは、ある公演を振り返ってこう言った。

「フィデルが見に来てくれたんだ。最後の場面で子どもたちがステージから客席に下り、観客のほっぺに落書きをしてみわった。フィデルは護衛を下がらせて、自分のほっぺに落書きをさせたんだよ。目には涙が浮かんでいた」

私はその後、ピースボートのフルタイム・スタッフとなり、キューバの港を担当するようになった。キューバを知らなかった若者たちが、革命を知り、そのかっこよさに魅了され、キューバに夢中になっていくのを頻りに目の当たりにした。カストロ前議長について書かれた本やマルクスを読み始めた学生もいたし、単身有機農業を学びにキューバを目指した若者もいた。

2010年9月“彼”との会合が実現

カストロ前議長と日本との関係について考えるとき、ヒロシマ・ナガサキ原爆投下は外すことはできない。1960年夏、革命の同志であったゲバラが広島を訪れてから、キューバの誰もがこの悲劇的な歴史と非人道性を学ぶことになった。

中学生の教科書約3ページにわりとしっかりと書かれており、市民が投下日を答えられる。その後、念願がなあって2003年に訪問し、「何百千万の人々が、あの地を訪れるべきだ。あそこで起こったことを、人類が真に知るために」という言葉を残した。キューバからの公式来日者は、必ずと言っていいほど広島を訪問している。

ピースボートは2009年から、ヒロシマとナガサキの

被爆者や継承者と船旅をしながら証言とメッセージを各地で伝える「被爆証言の船旅～おりづるプロジェクト」を企画している。船内にて参加者が核廃絶について考えると同時に、各寄港地にて証言を行い、核廃絶のメッセージを市民や行政に伝えている。

その取り組みのなか、2010年9月、被爆者を乗せたピースボートをハバナ港で迎え入れる3日前に、キューバ国家評議会議長室から連絡があった。「“彼”がみなさんを受け入れると言っている」。

面会の懇願書は送っていたが、最初“彼”とは誰のことを言っているのか分からなかった。その後の電話でも、カストロ前議長の“名前”を聞くことはなかった。「“彼”は、会いたいと思っている人だったら、誰でも受け入れるそうです」。

用意されたのは、市内にある立派な国際会議場だった。当日ピースボートの参加者を温かく受け入れてくれた姿は、護衛に手を引かれる“大きなのっぽのおじいちゃん”だったが、話し始めるとその内容は、もうろくとは程遠いものだった。翌日から3日間、機関誌「グランマ」に、会合の様子を省察として綴ってくれた。

キューバでチェルノブイリ原発事故に一番詳しい人

東日本大震災から1年後の3月にも面会は繰り返された。被爆者の方々に加え、福島原発事故の被害者、長年キューバが取り組んできたチェルノブイリ子ども支援の一人者が登壇した。キューバで、「チェルノブイリ爆発事故について一番詳しいのは誰?」と尋ねると、「フィデルだよ」と聞くことが多かった。

国の最高指導者は、国の最高研究者でも教育者でもあり、今後の核拡散に警鐘を鳴らす予測者でもあった。お会いしたとき、1回目の会合に関わったピースボートスタッフによる手作り写真集を渡した。受け取ると、「素晴らしいことを成し遂げるには、素晴らしい仲間がいなくてはならない。コンパニエロ(仲間たち)を大切に」と言った。

また会合数日後、共催のICAP代表には、彼の自筆



私たちと会合したとき、被爆者の方がプレゼントしたおりづる風鈴の音色を聞くフィデル

で書かれたメッセージカードが届けられ、「日本の素晴らしい仲間たちとの、貴重な時間をありがとう」と書かれていた。最後には、やはり見慣れたサインがあった。今でも強く私のこころに残っているのは、カストロ前議長の人間性なのだ。

いま、キューバは大きな転換期を迎えている。2014年の国交正常化宣言を歓迎した両国は、人の行き来から始まる自由化に乗り出している。開かれた在キューバ米国大使館には、連日ビザ面接を待つキューバ市民が長蛇の列を作る。一方、キューバに流れ込む観光客の数は、観光インフラが追い付かないほどだ。

私が通うこの10年、キューバの子どもたちに将来の夢を訪ねると、「チェのようになろう」から始まって、「弁護士になる、医者になる」と胸を張って答えた。今年、同じ質問をすると、ある少年の答えは「トウリスト（観光客）になりたい」だった。ハバナで自由に買い物し、モヒートを飲んで踊る観光客に憧れるのも無理はない。これが現代版正常化なのかもしれない。

今年10月、ピースボートはキューバへ

嘆いてはられない。フィデルが亡くなり、トランプが就任した。

1月25日、ドミニカ共和国にてCELAC（ラテンアメリカ・カリブ諸国共同体）第5回首脳会議が行われ、この共同体創設の発案者のひとりでもあったカストロ前議長への追悼が行われた。ラテンアメリカの悪影響を危惧する各国代表がラテンアメリカ・カリブ諸国の結束の強化を呼びかけ、最終文書でも強く約束された。

今年10月ピースボートは、前議長のいないキューバにニューヨーク経由で寄港する。キューバを訪れる参加者とともに、現状を学び、彼が残した革命の歴史と封鎖との闘い、その人間性は、これからも引き続き伝えていきたいと思っている。

第95回ピースボート 地球一周の船旅

2017年8月13日（日）～11月24日（金）

横浜発着 104日間

2017年8月14日（月）～11月25日（金）

神戸発着 104日間

キューバを訪れて以来、記者として10回以上の訪問を重ねてきた伊藤千尋さんほか、女優の東ちづるさん、同志社大学大学院教授の加藤千洋さんなど、多彩な水先案内人が乗船します！

資料の請求・問合せ 0120-95-3740（受付：9時～18時）

2016年12月、キューバ・サンタクララのCHOYさんから、加藤玲子キューバ友好円卓会議事務局スタッフに届いた手紙

玲子さん（すべての日本の友人へ）

訳：富田君子

フィデルの逝去にあたりキューバの人々への哀悼の意を表明してくれたことに感謝します。どうもありがとうございます。

人間の生の当然のプロセスであり、誰もがどのような形であれ終末にいたるものですが、多くのキューバ国民、外国の友人たちにとって彼の死はとても悲しいことでした。深い尊敬と敬愛を受け、歴史的に傑出した重要性を持った人物でしたので、彼の死は深い悲しみをもたらしました。この終末について適切に要約したキューバ独立の使徒であるホセ・マルティの言葉があります。「人生という事業をやり遂げた時、死は存在しない」。もうフィデルは物理的には私たちの中にはいないけれども、彼の思想や模範は生きています。

この間、彼の遺骨がハバナからサンチャゴ・デ・クープまで陸路で運ばれて行きましたが、町々には道路に沿って別れをする人々が並び、自然発生的にヨ・ソイ・フィデル「私はフィデルだ」と口々に言っていました。さらに、「キューバ革命」の政治的基本が多くの人々によって再確認されました。これはキューバ国民のこの死へのオマージュであり、革命事業を継続する決意の表明を意味しています。

玲子さん、私たちキューバ人は狂信的でもないし、過激主義者でも、原理主義者でもありません。キューバ国民は政治的・イデオロギー的に高い意識を持ち、真実と正義を識別することができるのです。いくつかの国々の敵方の宣伝にも関わらず、ここではいかなる人に対しても個人崇拜が行われたことはなかったと断言することができます。これこそが最も良い例です。

私たちにとってフィデルは聖人ではありません。一人の並外れた素晴らしい人間だったのです。生涯を通してキューバの主権と自由のために闘った傑出した革命家だったのです。そしてキューバ国民に諸国との連帯と国際主義の精神を促し進めたのです。

9日間喪に服し、その間ハバナやサンチャゴ・デ・クープの革命広場では式典が行われ大衆が参加しました。もう公的には喪はあけ、私たちすべての人々、キューバの革命家たちの心の中でのみ喪に服しています。国内は普通の生活に戻っています。いつものように新年のカードを送ってください、そうすれば私から友人たちに配ります。メリークリスマス、2017年が良い年でありますよう。あなた、家族、日本の良き友人たちに抱擁を。 チョイ



2015年、円卓会議のツアーでサンタクララのICAPを訪れた際に、会いに来てくれたチョイさん（右端）。中央の女性はサンタクララICAPのイリスさん